

# 郷土愛育む体験早くから

「住民にとって学生は孫みたいなもの。大学と住民が歩み寄り、地域を盛り上げていければ」。

松本大学（松本市新村）の学生と地元住民がふれあう「茶房」の運営プロジェクトで、地域代表を務める日詰政男さん（68）はそう期待する。

新村地区は5月1日現在、高齢化率（65歳以上の人口割合）が35・3%

## 未来をひらく

《第1部》ふるさと×アップデート

と市内35地区で9番目に高い。それだけに茶房は世代間交流の貴重な場だ。新型コロナウイルス感染症拡大前は月2回、お茶を飲んだり季節の行事を楽しんだりし、コロナ禍にあつても文通で交流を続けてきた。日詰さんは「住民は学生も含めた松本大学というものを知り、学生は私たちの世代について知ってくれた」と成果を語る。地区内のアパートに住む千野泰聖さん（21）「観光ホスピタリティ学科4年」は「気に掛けてくれる人がたくさんいて、日頃の声掛けが居場所づくりにな

### ⑥若者の地域参加 さらに

ると知った」と実感を込め、「将来は子供たちが地域の人に育ててもらえる環境をつくりたい」と教員を志す。

各地で近年展開されている信州型コミュニティースクールの「地域全体で子供を育てる」という理念に基づき、学校も児童・生徒の地域参加に積極的だ。松本市四賀地区の会田中学校は、コンサートなどの地域行事の運営に生徒を携わらせる。令和元年の夏祭りで実行委員を務めた望月太介君（16）「豊科高校2年」は「中学生になって地域



松本大学の学生と住民が交流する茶房。住民と世間話をする中で、「コミュニケーション能力が上がった」と話す学生もいる（松本市新村）

の人たちと話す機会が減ったが、世間話ができたと振り返る。安曇野市明科地域の活性化に取り組む住民団体「明科いまちつくろうかい!!」の一員には、地元明科高校の生徒が加わ

る。住民と一緒にあやめ祭りの事前清掃に取り組み、神社の祭りでは担い手としてお船に乗せてもらうことも。学校の文化祭には住民も参加する。

多様な進路や生き方が認められ、国境も超えるグローバル社会の今日にあつて、生まれ育った一つの地域だけで生涯を送る人は多くない。しかし、若い頃に地域に親しんだ経験が、将来の地域参加のハードルを下げることもある。今春に明科高校を卒業し、安曇野市職員として働き始めた高山開陸さん（18）は「高校で地域の皆さんが地元を愛し、良くしようと活動していることを知った。自分も地域づくりに携わっていききたい」と志望理由を語った。

（北條彩乃）

#### みんなの一言

・子供の頃から地域の人たちとマレットゴルフをしたり、通学路であいさつをしたりしているので、地域に愛着がある。住民同士が顔を合わせたり、話をしたりする機会の積み重ね、その土台がまちの元気に必要だと思う。

（松本市島内、大学生・高山英紀さん、21歳）  
※市民タイムスのHPなどのアンケートより



市民タイムス創刊50年